氷見市木育ビジョン

2018 年 10 月 30 日

氷見市

目次

1. はじめに　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P 1

2. 【過去】氷見における人と木の関わり・・・・・・・・ P 2

3. 【現在】現状と課題　・・・・・・・・・・・・・・・・ P 4

4. 【未来】進むべき方向性・・・・・・・・・・・・・・・ P13

5. 目指す姿　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P21

6. 今後の予定　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P29

7. ビジョンの位置づけ、計画期間　・・・・・・・・・・ P30

8. 資料編　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P31

1. はじめに

市内の林業・木材加工業関係者、子育て支援関係者、金融機関、学術機関、NPO団体、そして市内外の子育て世代の皆様方には、氷見市の木育ビジョン策定に向けて、大変貴重なご意見をいただきましたこと、心から感謝申し上げます。

さて、平成 28 年 3 月 23 日に、氷見市は自治体として木育に取り組むことを宣言する「ウッドスタート宣言」に調印し、氷見市で生まれるお子様に、地元の木でつくったおもちゃを誕生祝い品として贈るといった取組みを行ってまいりました。宣言から 3 年、この取組みが氷見市に根付き、地方創生に向けたエンジンとなっていくことを目指し、氷見市の木育は一つの転機を迎えています。

木育が目指すものは、身近な自然やくらしの中で樹木や木工に親しむことが少なくなった現代に、人と自然とのつながりを取り戻し、命を愛する気持ちを育むこと、そしてその知恵や技術を次世代に引き継ぎ、自然と共存した持続可能な社会を実現することと考えております。

しかし一方で、木の良さは誰もが感じつつも、コストの問題などで手が届かなかったり、モノや場だけでなく、その良さを伝える人が少なかったり、自然資源豊かな地域にもかかわらず、その良さを身近に感じる機会が少ないのが現状です。この課題を克服するためには、行政や林業・木材加工業界だけでなく、子育てや教育、金融機関などの市内企業、また市民団体など、業種の垣根を越えたネットワークづくりが求められております。

木を使うことで森が整備され、森が整備されたら海がきれいになる、海がきれいになると魚が増える。また、そんな循環と関わることで、人が育つ。木育を切り口にした地方創生。そんな氷見ならではの木育ビジョンについて議論していただければ幸いです。

どうぞこれからも、氷見市の木育の取組にご注目いただき、素晴らしい木育の輪を広めていただくことをお願い申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

平成３０年１０月３０日

氷見市長　林　　正　之

2.【過去】氷見における人と木の関わり

氷見は漁業のまちという印象が強いですが、面積の約 6 割は山林であり、かつては林業に携わる人が多く、山から木材を切り出すための工夫や苦労があったとされています。以下、歴史書から、氷見における人と木の関わりについて簡単に振り返ってみます。

古くから、木は建築用材以外にも、様々な方面に利用されてきました。ナラ、クヌギなどは薪として伐り出され、家庭用の燃料として使用されました。切り株からはヒコバエが成長し、10 年、20 年程経つと元通りの森林になり、繰り返しの伐採ができました。さらに下草、柴ですらも、牛馬の飼料として、また田畑の肥料として使われるなど、山の資源は人々の暮らしには欠かせないものでした。

そんな山林資源の利用拡大を巡った境界論争も度々起こり、また資源を保全していく観点からも、古くから林業政策が行われてきました。例えば、加賀藩の時代に行われた取り組みに「七木の制」があり、松、栗、杉、欅、樫、桐、栂といった木の伐採に厳しい制限を設け、山番が盗伐者の監視に当たっていたそうです。

また、海岸砂丘地帯には現在、広大な松林が広がっていますが、砂防・防風林となるには長年にわたる植樹の努力とその継続が必要だったと推測されます。いつ頃から始まったかは不明ですが、近世に入ってからは、加賀藩の治山治水と木材資源確保のための植林政策が行われていたようです。

木を活かす技術についても、この加賀藩の時代に大きな動きがありました。天正 15 年、前田利家に従った大工 16 人が石動山山麓の大窪村に定着し「大窪大工」と呼ばれました。仲間の結束と伝統技術の確かさから、氷見を中心に広い範囲の寺、民家の建築に活躍の場が広がりました。遠くは五箇山・白川地方の合掌造りにも携わり、それがきっかけで、氷見の獅子舞が五箇山地方に伝わったとされています。

明治に入り、七木の制が解除されると、急速に乱伐が進み、地元の木だけでは足りず、やがては能登や秋田からも木材の移入をするようになりました。第二次世界大戦中には、過伐によって、山が丸裸になったところもあったとされます。

そんな中、明治後年から大正時代にかけて、全国的に植林ブームがおこり、山主さん達は植林に熱を入れました。在来の地杉の他に、通常の杉は 50 年かかるところ、成長が早く 2、30 年で一人前の用材として伐り出されるオタヤ杉（俗称「ボカ杉」）が導入され、昭和に入ってからの電気・電力の普及と共に、電柱用としての需要が多くなり、ボカ杉の造林が急速に広まりました。

しかし、昭和 28 年からコンクリート製の電柱の採用がはじまり、ボカ杉の電柱需要は少なくなりました。また同時に、安価な北洋材が大量に輸入されるようになり、ボカ杉は建築用材としても売れなくなってきました。また、燃料材としての炭も、戦後の燃料があまりない頃は引っ張りだこでしたが、昭和 40 年代に入り木炭需要が減少したことに伴い、生産量は激減しました。

この結果、現在の氷見の山には多くの杉が植えられたままとなり、伐採期を迎えています。行政や森林組合を中心に、林道や高性能林業機械が整備され、効率のよい伐採、搬出が進められていますが、一方で山林の境界が分からない山主や、不在地主が増えています。

たしかに、技術革新によって生産効率は上がりました。暮らしも楽になったと想像されます。しかし一方、豊かさの観点ではどうでしょうか。人と木の距離が近い、自然豊かな氷見ですが、その距離は、現在も本当に近いといえるのでしょうか。

本項の最後に、かつての樹木の伐採の様子について記載します。

「儀礼的なものとして、樹木を伐採する時はまず山中で最も大きい木の根元にお神酒をかけ、ガンドウ（提灯の一種）を持ちながら祈祷した。（中略）また、木を倒す方向は、村の氏神や辰巳の方向（南東、山神がいるとされていた方向）へ倒さないようにしていた（中略）また、3 月 9 日と 12 月 9 日が山祭りの日で、この日は山に入らず仲間と一緒に酒を酌み交わした。」
（『氷見市史 6　資料編四　民俗、神社・寺院』からの引用）

【参考文献】
・『氷見市史』
1　通史編一　古代・中世・近世
2　通史編二　近・現代
6　資料編四　民俗、神社・寺院
・『熊無村史』
・『氷見市森づくりプラン』

3. 【現在】現状と課題

(1) 氷見における人と木の関わりについて

氷見市では、平成 27 年 2～3 月に、氷見の人達が、暮らしの中にどれだけ木を取り入れているのか、その実態を調査するため、氷見市内の山主、森林組合組合員 4,000 人を対象に、「氷見の山についてのアンケート」調査を実施しました。(1,000 人抽出。回答者数 471 人。回収率 47.1%)

Q1. あなたの家には、木を燃料としたストーブ等がありますか？（ある場合はその種類を選択:**複数回答可**）

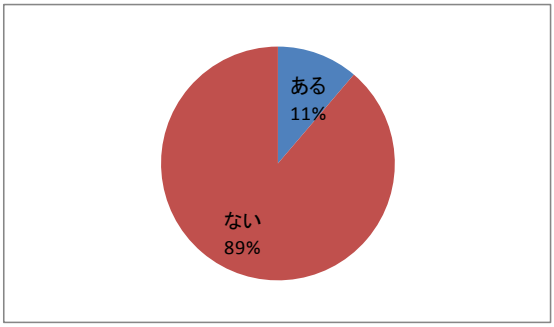
ある（ 薪ストーブ ・ ペレットストーブ ・ 囲炉裏 ・ 暖炉 ・ ダルマストーブ等の簡易ストーブ ・ その他 ）

ない

木質バイオマスストーブ普及率は11%。
うち、6割は薪ストーブ。
次いで2割がダルマストーブ等の簡易ストーブ。
囲炉裏、暖炉と続き、薪風呂や薪ボイラーを導入されている方もいた。

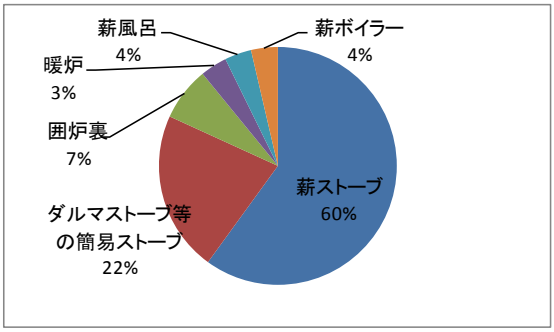
Q.
あなたの家には、
木を燃料としたストーブ等が
ありますか？

ある	53
ない	418
総計	**471**



Q.1
「ある」と答えた場合、
その種類は？

薪ストーブ	33
ダルマストーブ等の簡易ストーブ	12
囲炉裏	4
暖炉	2
薪風呂	2
薪ボイラー	2
総計	**55**



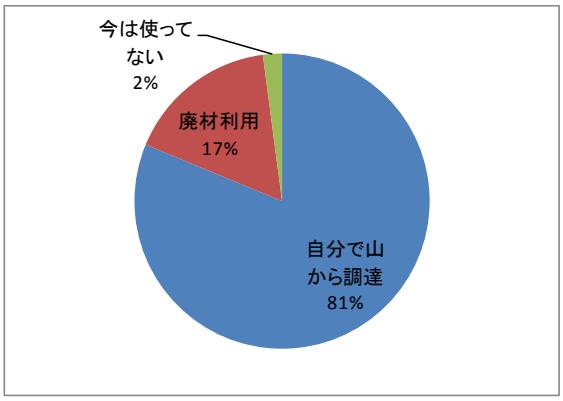
Q2. 主に、薪はどうやって調達していますか？ （**一つだけ選択**してください）

自分で山から調達 ・ 店で購入（ 氷見産の薪 ・ 不明 ） ・ 廃材利用 ・ その他：

自分で山から調達している人が**約8割**。
約2割の人は廃材を利用している。

Q.2
主に、薪はどうやって
調達していますか？
（一つだけ選択してください）

自分で山から調達	39
廃材利用	8
今は使ってない	1
総計	**48**



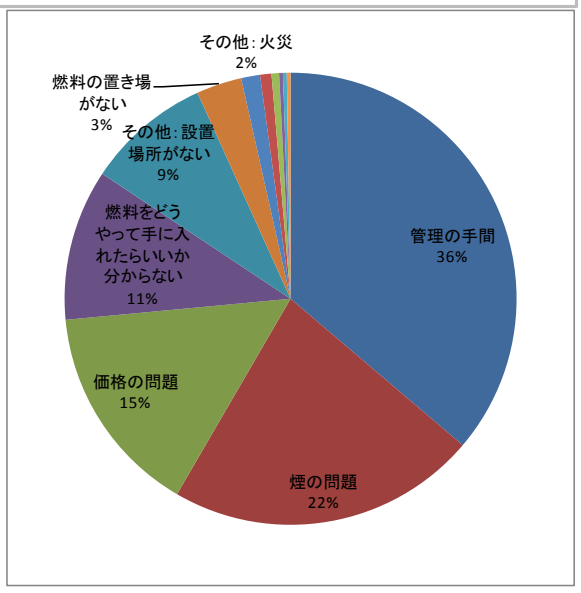
Q3. 今後、木を燃料としたストーブ等を導入するためには、何が一番の問題ですか？ （**一つだけ選択**）

価格の問題 ・ 煙の問題 ・ 管理の手間 ・ 燃料をどうやって手に入れたらいいか分からない ・ 燃料の置き場がない ・ その他の理由・・・

「管理の手間」を問題としている人が**約4割**。
次いで約2割の人が「煙の問題」。
「価格の問題」、「燃料をどうやって手に入れたらいいか分からない」がつづく。

Q.3
今後、木を燃料とした
ストーブ等を導入するためには、
何が一番の問題ですか？
（一つだけ選択してください）

管理の手間	134
煙の問題	82
価格の問題	56
燃料をどうやって手に入れたらいいか分からない	40
その他：設置場所がない	33
燃料の置き場がない	12
その他：火災	5
その他：導入の意志なし	3
その他：薪づくりの時間と人手不足	2
その他：和風家屋のため改築に経費がかかる	1
その他：消火設備がない	1
その他：体力的な問題	1
総計	**370**



Q4. あなたは、氷見の木でできたもの（薪以外）を使っていますか？
（ある場合は種類を選択してください：**複数回答可**）

ある （ 住宅建築材 ・ 家具 ・ 食器 ・ コースター等の生活雑貨 ・ おもちゃ ・ その他・・・ ）

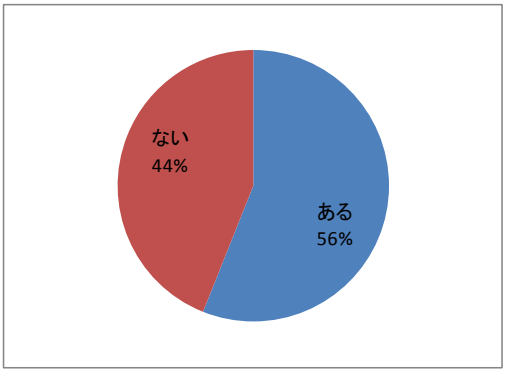
ない

約6割の人が氷見の木でできたものを使っており、
そのうちの**約9割**が住宅に氷見産木材を使用している。

つづいて、家具、コースター等の生活雑貨等に
氷見産木材でできたものを持っている。

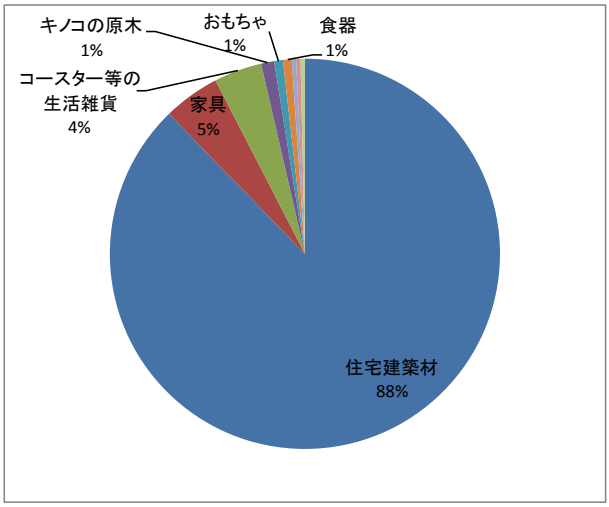
Q.4
あなたは、氷見の木で
できたもの（薪以外）を
使っていますか？

ある	255
ない	200
総計	**455**



Q.4
ある場合は種類を選択してください：複数回答可

住宅建築材	243
家具	13
コースター等の生活雑貨	11
キノコの原木	3
おもちゃ	2
食器	2
農作業場	1
盆栽台	1
雪囲い	1
総計	**277**



山主さん達の約 1 割が木を燃料としたストーブを使用しており、また約 6 割が氷見の木でできたもの、主に住宅に氷見産材を使用していることが分かりました。木が使われていることはすぐに分かっても、それがどこで生まれた木なのかまで分かる人は、多くないのではないでしょうか。氷見の木、山への意識が高い山主さん達ならではの傾向が現れた形となりました。

とはいえ、アンケートをとった平成 27 年 3 月時点の氷見市の人口は約 5 万人で（平成 30 年 7 月現在は約 4 万 8 千人）、仮に山主さんが全員氷見にいたとすると、その約 1 割にあたります。山主さんが前述の結果であれば、残りの 9 割、多くの市民が暮らしの中に氷見の木を取り入れている割合は、さらに下がるものと想像できます。

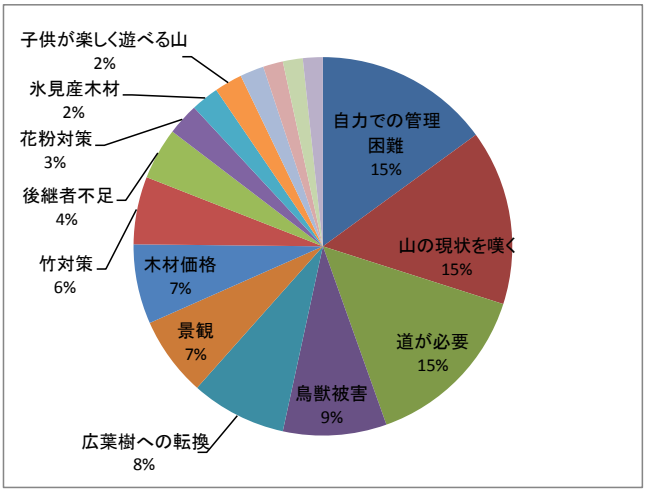
山間部から中心市街地、郊外への人口移動は、今後も進むことが予想されます。氷見の人と木は、物理的にも、そして心理的にも、その距離がさらに広がってしまう可能性があります。

なお、アンケートでは市内の山主さん達が、自身の山に対してどんな思いを持っているかについても問いかけています。

Q5. あなたが氷見の山に対して思うことを、ご自由にご記入ください。

アンケート回答者471人中、363人（約8割）の人が自由意見欄に記入。
以下は5件以上、類似の意見があったものを抽出。
自力での管理が困難、山の現状を嘆く声が多かった他、
道が必要、鳥獣被害が深刻といった声、
また、広葉樹への転換を図るべきといった声や、景観に関する意見もあった。

自力での管理困難	44
山の現状を嘆く	44
道が必要	43
鳥獣被害	26
広葉樹への転換	24
景観	20
木材価格	20
竹対策	17
後継者不足	13
花粉対策	8
氷見産木材	7
子供が楽しく遊べる山	7
林産物の生産	6
森林整備への意欲あり	5
境界明確化	5
風倒木処理	5
総計	**294**



Q6. あなたは、自分の山が、どんな山になったら幸せですか？ （**一つだけ選択**してください）

1. 木が高く売れる、宝の山
2. 春には新緑が、秋には紅葉が美しい山
3. 実のなる木、山菜、キノコといった、自然の恵みでいっぱいの山
4. 子どもや孫たちが楽しく遊べるような、身近な自然とのふれあいの場としての山
5. その他　（　　）

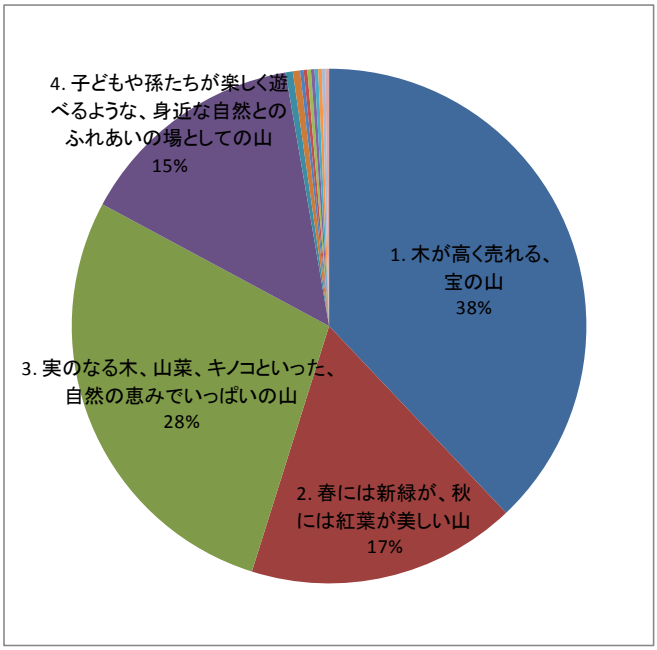
「木が高く売れる宝の山」が最多の**約4割**。

つづいて**約3割**が「実のなる木、山菜、キノコといった、自然の恵みでいっぱいの山」を選択。

「春には新緑が、秋には紅葉が美しい山」と「子どもや孫たちが楽しく遊べるような、身近な自然とのふれあいの場としての山」も約2割づつとなっている。

Q.5
あなたは、自分の山が、
どんな山になったら幸せですか？
（一つだけ選択してください）

1. 木が高く売れる、宝の山	168
2. 春には新緑が、秋には紅葉が美しい山	75
3. 実のなる木、山菜、キノコといった、自然の恵みでいっぱいの山	124
4. 子どもや孫たちが楽しく遊べるような、身近な自然とのふれあいの場としての山	64
5. その他：管理の必要性が低い山	2
5. その他：手入れされた山	2
5. その他：ない	1
5. その他：ふつうの山	1
5. その他：本来の自然の姿、人が手を入れない安定した	1
5. その他：治山治水機能をもった健全な山	1
5. その他：何も思わない	1
5. その他：大木が育つ美しい森	1
5. その他：境界のわかる山	1
5. その他：杉の木が少なく、広葉樹の多い山	1
総計	**443**

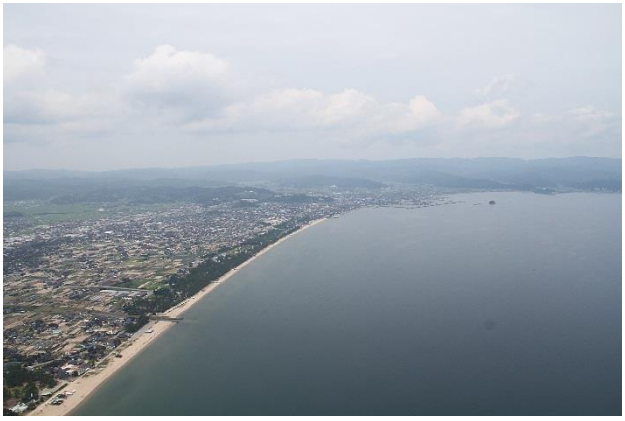


山に対しては自力での管理が難しく、道の整備を求める声や、鳥獣被害など、山の現状を嘆く声も多く聞こえてきます。また、山主さん達が山に対して抱く思いで、最も多かったのは「木が高く売れる宝の山」でした。かつて杉は電柱材として重宝されたことから、山を持っているだけで大きな財産とされており、その時代を知る世代が最も山に期待するのは、経済性なのかもしれません。

そこで次に、経済性の観点から「氷見市の木材加工業」の現状と課題についてみてまいります。

(2) 氷見市の木材加工業の現状と課題

市全体面積の約 6 割を占める森林は、標高が低く緩傾斜地に存在することから施業がしやすく、林業にとって恵まれた環境にあるとされています。森林は氷見市街地を中心に、ほぼ同心円状に広がっており、市域の概ね中心に富山県西部森林組合氷見支所と、市内最大手の製材所があり、近隣市町村に大手パルプ、製材会社、バイオマス発電所がある等、供給先へのアクセスにも恵まれています。



また、県内では比較的積雪量が少ない土地であることから、根曲がりが少なく、建築用材として使える木材が多く、県内でもその比率が高い地域とされています。氷見産杉（以下「ひみ里山杉」）の特徴としては、肥沃な土質もあって、成長が早く、木肌が他の杉と比べて明るく淡い色合いをしているといった点があげられ、平成 29 年に開館した富山県美術館においても内装材として採用されました。

さらに市内には、平成 24 年に森林組合、製材所、住宅会社、工務店、運送、バイオマス関連企業による「ひみ里山杉活用協議会」が設立され、ひみ里山杉のブランド化に向けて森林伐採体験や植樹イベント等を行っており、木材生産者、製材所、工務店が連携した、顔の見える家づくりに向けた氷見産材の PR を行っています。

しかし、ひみ里山杉の長所の一つは成長の早さですが、逆に言えば木目が粗いものが多いとも言われており、この点で敬遠する建築関係者は多いようです。市内には 6 軒の製材所がありますが、売上の減少や後継者がいないことから、廃業となる製材所が増えつつあります。その他木材加工業についても、市内には数名の家具職人、彫刻家がいますが、製材業同様、廃業する人が近年増えています。林業にとって好条件の場所にも関わらず、十分にその力を発揮できずにいるのが現状です。

この原因としては「木であればいい」「とにかく安く」という消費者ニーズが根強いこと、また大手企業の下請け、孫請けから抜け出せず、利益率が上がりにくい構造となっているといった点があげられます。

また、平成 30 年 9 月に市内の木材加工業者を対象として行ったアンケートによると、氷見産木材を使った商品を独自に開発、販売している事業者は、ほぼいないということが分かりました（P. 16 参照）。数社へのヒアリングを通し、中小規模のため商品開発部門を持たず、氷見産材の強みを活かした利益率の高い内装材などの製品開発ができていないこと、さらに木工製品は実物に触れて、肌触りや香りを五感で感じてもらうことで、その魅力を伝えやすい製品ですが、消費者が直に商品に触れ、その良さを知る場が市内に無く、消費者への直接販売の機会が限られているといった課題が見えてきました。

今後氷見産材の強みを活かし、生き残りをはかっていくためには、商品のトレーサビリティーを高め、デザインやストーリーといった付加価値をつけ、消費者への直接販売体制を構築していくことが必須だと考えられます。また、ひみ里山杉活用協議会のような団体が、継続して PR を行っていく体制づくりも重要です。

このような状況の中、林業振興策の一環として、平成 27 年度から氷見市は木育推進事業を開始しました。北陸で唯一、自治体として木育に取り組むことを宣言した自治体となり、市内で生まれた子どもに、地域産材で地元の木工作家が作った木製玩具を贈呈することを通し、ふるさと愛の醸成をはかる誕生祝い品事業や、東京おもちゃ美術館と連携した「木育キャラバン」といった事業を行っています。氷見市の木育の取り組みに関する現状と課題についてみてみます。

(3) 氷見木育の取り組みに関する現状と課題

市内における誕生祝い品事業や保育園への木製玩具導入、木育指導者の養成により、幼児期から「木のよさを伝える」木育の普及基盤が整いつつあります。また、イベント時における子どもとおもちゃの見守り役としてシルバー世代の活躍の場が生まれ好評を得ている他、木製玩具製作研修会といった木育への取り組みから、市内において木工作家を志す芽が現れ始めています。さらに、市外においても、木育キャラバン等のイベントにより、子育て世代を中心に多くのファンを獲得しており、県内、北陸で木育に取り組む先進的な自治体として認知されつつあります。

氷見市が取り組んできた木育の根底には、「自然体験」がキーワードにあります。ウッドスタート宣言を行った自治体の多くは、農林業に関する課や子育て支援に関する課が主導で木育を推進していますが、氷見市は「海浜植物園」を拠点場所として、木育事業に取り組んできました。このため「木のおもちゃを入口に、氷見の自然へ」というコンセプトのもと、展示植物同様、木のおもちゃをきっかけに、実際に生きている外の自然に関心を持ってもらうことを目指し、室内だけでなく、野外における自然体験プログラムの提供に取り組んできました。これにより、自然豊かな氷見への郷土愛育成や、地産地消へつなげていきたいと考えてきました。

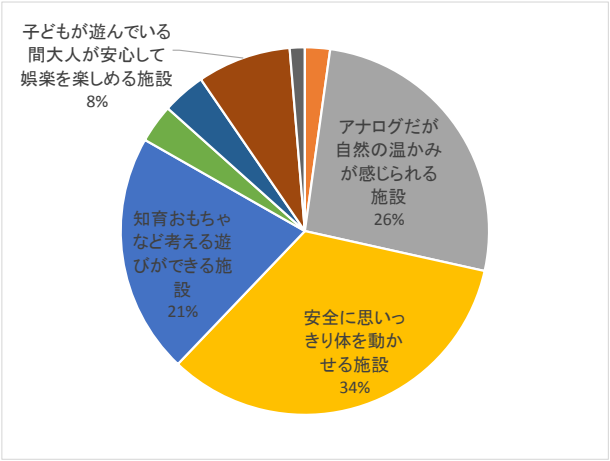
これを後押しする声は、木育キャラバンにおける来場者アンケートにも表れており、近年インドア化する子ども達の遊びに対し、雨天時も含め、屋内外で安全に、思い切り体を動かし、かつ自然と触れ合える環境を求めている多くの声が集まりました。このようなニーズを満たす施設は市内になく、氷見産材を取り入れた屋内施設を設けることで、地域産材の PR の場、及び新たな交流拠点となる可能性を秘めていると考えられます。

（木育キャラバンでの来園者アンケートより）

Q. 氷見で子どもが遊べる施設には、どんなことを期待しますか？（三つまで選択可）

・デジタル技術を取り入れたゲーム等が豊富な施設
・アナログだが自然の温かみが感じられる施設
・安全に思いっきり体を動かせる施設
・知育おもちゃなど考える遊びができる施設
・おじいちゃん、おばあちゃん達と交流ができる施設
・子育てのプロから、子育てに役立つことを学べる施設
・子どもが遊んでいる間大人が安心して娯楽を楽しめる施設
・その他

・安全に思いっきり体を動かせる施設が34%と圧倒的。次いで、アナログだが自然の温かみが感じられる施設、知育おもちゃなど考える遊びができる施設が20%台でつづく。



しかし、木育に関するノウハウを地産化できていないため、人材、プログラム、木製玩具を地域外に依存しているのが現状です。将来的には地域の人材、氷見産材を使った木育事業の実施により、資金の地域内循環をはかり、また継続した事業の効果波及を目指すため、木育の拠点づくり、常設化が求められています。

以上、氷見における人と木の関わりについて、過去から現在、そして現在見えてきた課題についてみてきました。これを踏まえ、未来について、これから進むべき方向性について、氷見市の行政、林業、子育て支援、NPO 団体、学術機関、金融機関といった関係者が一堂に集まり、木育会議を実施しました。その検討内容について、以降記載してまいります。

4. 【未来】進むべき方向性

(1)氷見市木育会議における検討

氷見市の行政、林業、子育て支援、NPO 団体、学術機関、金融機関の関係者が一堂に集まり、今後氷見市の木育が進むべき方向性について議論する「氷見市木育会議」を実施しました。そこで頂いた意見の概要は、以下のとおりです。

- 富山県美術館の内装材に採用された**ボカスギは、本当に色が美しい。他の産地と比較しても、氷見杉の色にはかなわない。**これは自信をもって言える。
- 日本人はこれまで木と共に生きてきた。しかし学生に調査すると、まな板もプラスチックで、ほとんど木製品が使われていない。そんな流れの中、木だけで、板だけで組み立てられる 3 坪の小屋「ひみ板小屋」を制作した。
- **氷見市の木育は「使い手」を育てるというところで、「大人のための木育」も積極的に取り組んでいってはどうか。**
- 木目調のプラスチック板など、フェイクが多い世の中。**氷見市の木育は、特に子どもに対しては本物志向でいくべき。**
- 幼い頃の記憶や体験は大変重要で、大人になっても残っていることが多いので、**子ども達に生涯心に残る仕掛け、環境づくりを木育を通してできればいい。**
- 木製玩具の子ども向けワークショップ等でお母さん達の声を聞いていると、家庭でものづくりをする機会が少ない。家を汚したくないとか、材料を用意する手間隙から。**子ども達は工作が好きなのに、家庭でできない状況があり、**学童や保育園などでワークショップの講師として呼ばれることが多くなってきた。
- 氷見市の保育士さんの中でも木育インストラクター養成講座を受講された方がたくさんいらっしゃるが、実際に工作を教えるのは自信がないということで自分が呼ばれることが多い。今後長い目で考えると、**保育士さん自身が自信をもって講師をできるように、そのような講習や実践の場があればいいと思う。市などで工具の貸し出しができるシステムがあれば取っ掛かりやすいのでは。**
- ロスになった材を高齢者福祉施設にもらっていただいたら、リハビリに使う道具とするために磨く作業を、施設利用者に行ってもらっていると

のことだった。認知症の男性の方が、手芸では時間がもたず、すぐ帰りたがっていたところが、「これを磨いてください」と木を渡すと、木のものだと嫌がらずに作業をしてくれるそうで、施設職員が喜んでくれている。**木育は、高齢者のリハビリ、福祉方面にも広がる可能性を感じている。**

- 富山は福祉の面で「富山型デイサービス」という先進的な取り組みがあるので、**福祉と木育がつながればいい**と思うし、氷見はハンドボールが盛んだが、夏の練習を炎天下で行うより、林道を走るトレーニングを行うなど、**スポーツと山もつながりそうだ。**
- **移住定住の面で**言えば、自分で何か作りたい人にとって、氷見は最適な場所。山形に住んでいる弟が来訪した際に、「なぜこんなに家が大きいの」と驚かれた。**氷見は家が大きいし素材も豊富で恵まれている。これからもっと、つくる場所や機会が増えていってほしい。**
- 普段おとなしい子どもも、ものづくりを始めると積極的に行っている。子ども達には作りたいという欲求がある。
- 呉西をひととおり見て回ったが、**氷見は素材が豊富で、特に木に加えて魚がある。**燻製づくりができる。木と組み合わせられる素材があるところがいい。
- ５万立米の丸太を生産しており、内２万立米、約半分を氷見で生産している。**氷見市のボカスギは非常に優れている。**丸太でもＡ～Ｃのランクがつけられているが、**氷見産はＡ材４割、Ｂ材４割、Ｃ材２割と非常に優秀。**
- 実は氷見市の森林は、人工林（スギ）は３割で、残り７割は広葉樹林。里山を中心にスギが植えられているので、多いように感じている。**広葉樹の活用も考えている。**
- 通常は伐採してから製材まで非常に時間がかかるが、氷見は市内に製材所があるのでコストも安くつくので良い。
- しばらくの間植林を行っていなかったので、植林の技術伝承に取り組んでいる。**目指すのは切って、売って、育てて、植えて、使ってという循環型の林業。**
- ３年前、県農林中央金庫から一般的な積み木をもらったが、子ども達は熱中して永遠に遊んでいられる。
- **子ども達が遊びに行く施設に、木のおもちゃがあればよいと思っている。**施設までのバスも出ていて、いつでも気軽に行ける施設があれば嬉しい。２年前の木育キャラバンに参加したとき、子ども達同士でけんかになるかと心配していたが、そんなことは全くなかった。時間を忘れて遊びに

没頭していた。**普段は保育園のみんなと遊びに行って、土日は親子で遊びに来る、そんな施設が氷見にあってほしい。**

- **道具の使い方を教えるのには不安があるのでそういう講習があれば受講したい。**金槌などの道具は、市内の保育園間で貸し借りができると思う。
- 昨年２月に市と地方創生に係る包括連携協定を締結し、それぞれのＫＰＩ達成に向けて相互に連携していくことを約束した。
  金融業として取り組んでいることとして、
  ①**商工会議所、政策金融公庫、氷見市などと連携して色々な補助金を取り入れようとしている。**近年、林業で独立したいという方への融資も行った事例がある。
  ②ビジネスマッチングを進めている。**食育は進んでいるが、産業で何かマッチングできないか**と探しているところ。
  ③6 月に「鞍川クラブ」という紅葉を植えようという団体が設立。氷見は杉が多いので、**紅葉山を一つ作ろう**と 20 年計画を立てている。
  ④セントラルバンクの信金中金から、氷見市の木育の取組を紹介してほしい、資料がほしいとの問い合わせがある。ここは**全国展開**している。
  金融業は限られた取組になるが、**知恵と人とお金がつけば、何かできる**と思っている。
- 氷見らしい言葉ということで言えば、**「木一本、ブリ千本」**という言葉が昔から漁師さんの間で使われている。
- 氷見市を日本農業遺産、世界農業遺産の認定に向けて農水省へ申請中だが、そのテーマは**「氷見寒ブリを育む農林水産循環システム」**である。氷見は元来地すべりの多いところなので、山に植樹をして、水源が涵養され、その水が用水を流れて水田稲作や農業に使われている。氷見は布勢の円山など湿地帯が多かったが整備をして水郷公園もできている。また、用水では絶滅危惧種のイタセンパラという天然記念物も生き長らえており、最終的に山からの水が海に流れ着くわけだが、**山からの恵みがあって美味しいブリが育つ。**
- **木育は川上の林業と川下の漁業をつないでくれる。また、森林は動物との境界線という面もあるし、防災という面も持つ。循環があって生態系が守られている。木育には色々な面があるが、森をどう循環させていくか、木のぬくもりを教育現場で伝えたり、高齢者のリハビリで活用したりするなど、人間らしい生活を送っていくためにも必要だと感じた。**
- 近江商人の言葉に「三方良し」という言葉があるが、木育にもこの言葉が当てはまると考えている。木育は３つの会員によって成り立つ。

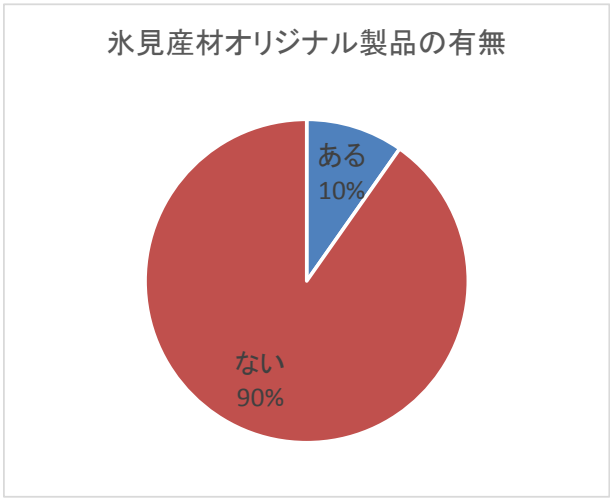
- 作り手会員:ひみ里山杉活用協議会、富山大学芸術文化学部、木工作家、富山県西部森林組合
- 使い手会員：保育士会、NPO 法人ひみ森の番屋
- 広め手会員：金融機関、東京おもちゃ美術館
- この３方に、森林環境税がガソリンとなって勢いをつけてくれるものと楽しみにしている。

この氷見市木育会議で頂いたご意見を基に、将来ありたい姿に向けた「作り手」における連携の可能性について、平成 30 年 9 月から 10 月にかけて、以下の調査を行いました。

(2) 「ひみの木しごと人」との連携

氷見市における木材加工業の現状と、商品開発に向けた連携の可能性を探るため、氷見市内で木に関する仕事に携わる方（林業、木材・木製品製造業、家具・装備品製造業が対象。ひみ里山杉活用協議会、氷見木材組合、氷見地域建築組合　加盟業者など）市内約 170 社を対象に、以下のアンケートを実施しました。（回答 41 社）

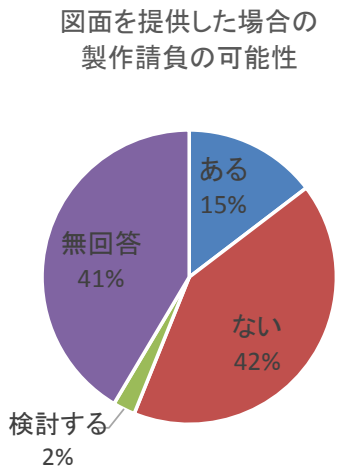
設問 1. 氷見産の木を使って、御社が独自に製作、販売されている商品はありますか？



氷見産材を使ったオリジナル製品を製造、販売していると答えたのは10%にとどまり、90%は無いと答えた。

有ると回答したのは、木工作家（家具・建具職人）、彫刻家、及び一部の大工で、無いと答えた多くが建築業を営む事業者だったことから、氷見産材を使った住宅建築が少ない現状が垣間見えた。

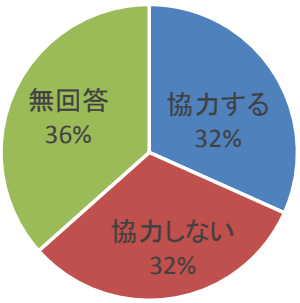
設問 2. 木製玩具や、家具、備品など、図面をご提供した場合、製作を請け負っていただける可能性はありますか？



氷見産材を使った商品を独自に開発できずとも、図面が提供された場合に、製作を請け負っていただく可能性があるか尋ねたところ、あると答えたのは15%、ないと答えたのは42%、無回答は41%という結果だった。

ある建具職人へのヒアリングによると、職人が減っており、建具に関する仕事が集中し、他の仕事に手を出す余裕がないとの声があった。

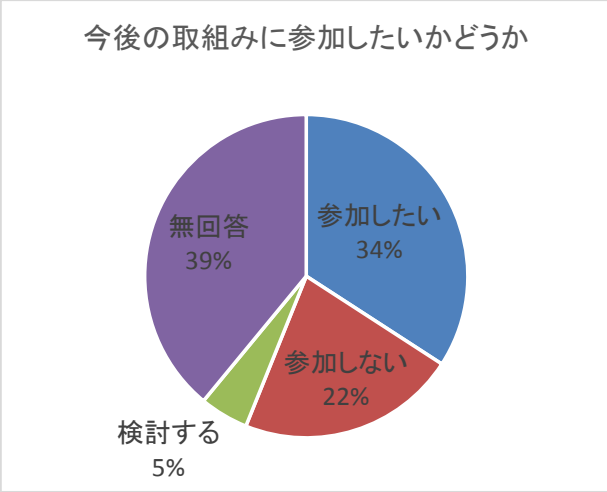
設問 3. 氷見の子ども達のために、皆さまの技術・経験を活かして、ご協力いただけることはありますか？（例えば、日曜大工講座や、木育ルーム整備にあたり内装木質化への協力）



日曜大工講座や木育ルームの整備にあたって、内装木質化へご協力いただけるかについて質問したところ、32%から協力するとの声をいただいた。

可能な範囲で協力したいという方は、一定数存在していることが分かり、木工教室や建具製造、伐採・植樹体験や、薪づくりといった具体例を挙げられる事業者もあった。

設問 4. 今後、市内の林業・木材加工業活性化に向けた取組みがある場合、参加したいと思いますか？



最後に、今後の市内における林業・木材加工業活性化に向けた取組みがある場合への参加意欲について質問したところ、参加したいと答えたのは34%という結果だった。

検討すると答えた方も含め、本事業の動向を見つつ、可能な範囲で協力いただける事業者が一定数いるということが分かった。

以上のアンケートの他、平成 30 年 10 月 6 日（土）に行った事業者交流会「ひみの木しごと人の集い」では、屋外における木材への塗装技術による協力や、氷見産杉の集成材を使った場合の近隣市町村との広域連携も検討する必要性、食器に氷見産材を取り入れるといった「食育」とのコラボの可能性といったご意見をいただきました。

今回のようなアンケートや交流会は初めての取組みであり、本事業の動向を見つつ、という事業者が多かったものの、連携に向けた可能性を感じる第一歩となりました。

(3) 富山大学芸術文化学部との連携

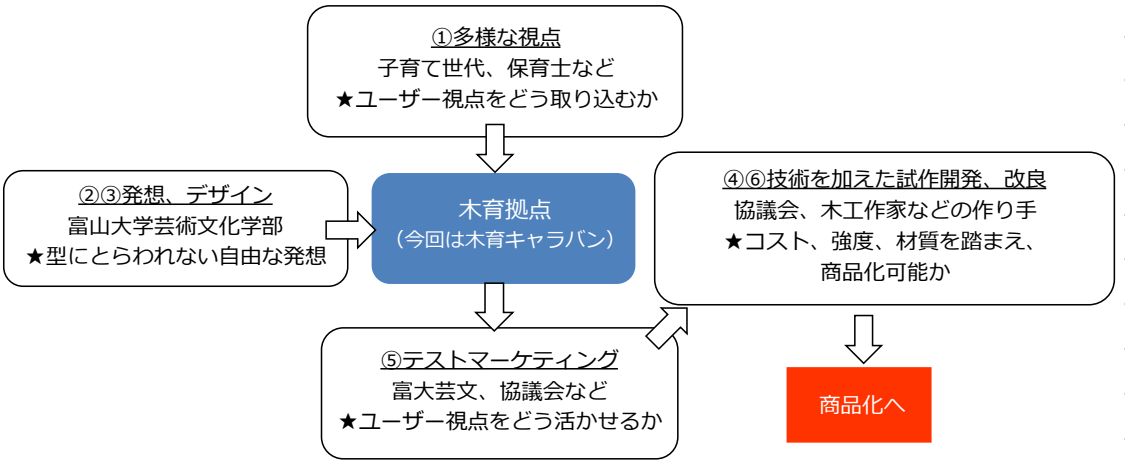
氷見産材を使った商品開発に向けて、富山大学芸術文化学部とひみ里山杉活用協議会が連携し、12 名の学生が氷見産の杉材を使った「こどもの家具」というテーマで作品制作を行いました。

こどもの家具をデザインするにあたっては、氷見市内の保育園のご協力のもと、園児の活動や園の環境について見学し、デザインの参考とさせていただきました。

家具材に広く一般的に使われている広葉樹とは違い、針葉樹である杉材は柔らかく、家具材として使うにはデザイン上の制限が生じます。発表された作品は、加工や強度等、解決しなければならない課題はありますが、杉材の可能性について提案されたものです。

この取組みは、商品開発の仕組みをつくるために設定した、次のような仮説に基づいています。

①多様な視点からの発想をベースにした②アイディアと、③デザインや④技術を加えた試作開発、⑤テストマーケティング、⑥改良といった PDCA サイクルを、何度も回していく体制



今回の取り組みは、こうした商品開発の仕組み（仮説）が機能するかどうかを実際に試行実験し、確かめることにより、今後の仕組みづくりに向けた第一歩といたします。

以上のように、本ビジョンを策定するにあたっては、過去から現在における人と木の関わりについて振り返り、アンケートなどの現状分析から見えてきたヒントを基に、未来へ、進むべき方向性について模索してまいりました。また、その方向性に間違いがないかについて、現時点で可能な限りの検証を同時に行うことで、この氷見市木育ビジョンが、単なるビジョンにとどまることなく、実効性のあるものにしてまいります。

氷見市の木育が目指す姿は、次のとおりです。

5. 目指す姿

氷見市の木育が目指す姿は

山から海まで

こどもからお年寄りまで

氷見に生きる全ての「命」が　つながっていることに気づく

そんな木好(キズキ)きを増やしていくことです

そのために

こども達が生涯心に残る

氷見の自然を活かした環境づくりを

木育を伝えていくための人材育成支援や

林業　教育　福祉といった垣根を越えた連携によって実現し

「木一本(きいっぽん)、ブリ千本(せんぼん)」を　体現するまち

氷見市の　地方創生に向けたエンジンとなることを

目指します

氷見市木育宣言

平成30年10月30日

この木育が、文化としてこの地に根付き、また地方創生に向けた効果を今後も継続的に発揮していくことを目的に、氷見市海浜植物園に、以下イメージの木育拠点をつくることを目指します（平成 33 年 4 月オープン目標）

1．「自然」を切り口とした子育て・教育支援、多世代交流の場

海浜植物園内に氷見産材を活用した屋内空間、木製玩具を整備。
雨天の多い北陸でも安心して自然とふれあえる場となり、市内外から子育て世代を中心に多くの人が来園する。アナログな木のおもちゃと人をつなぐのはシルバー世代。高齢者のいきがい創出にも貢献する場となる。

↑イメージ　木育キャラバン in 氷見

2．着地型観光の推進拠点

場を運営するのは、**林業、子育て関係者を中心として設立された民間組織。氷見の自然を活かした体験プログラム**が頻繁に行われ、民宿と連携した**宿泊型体験プログラム、グリーンツーリズムが行われる等、氷見の自然への入口**となる。

↑イメージ　ツリークライミング、森林伐採体験など

3．林業分野における地域商社機能

拠点では**市内木工製品の商品開発・消費者への直接販売**を行う。
氷見産材で作られた内装木質化空間、木工製品は、それ自体が**ショールームの役割**も持つ。**内装木質化空間は移動・組立式**で自由なレイアウト変更が可能。氷見市版木育キャラバンとして屋外展開や出張ＰＲを実施。

↑イメージ　ひみ里山杉活用協議会「ひみ板小屋」

1．「自然」を切り口とした子育て・教育支援、多世代交流の場

氷見市海浜植物園内に、氷見産材を使って内装を木質化した空間と、木製玩具を整備します。これにより、雨天の多い北陸でも安心して自然と触れ合える場をつくり、市内外の子育て世代が多く訪れる場所とする他、アナログな木のおもちゃと人をつなぐ役割として、シルバー世代の活躍の場とすることで、高齢者のいきがい創出にも貢献する場となることを目指します。

【具体的な取組みイメージ】

- 誕生祝い品セレモニー
  氷見市では平成 28 年度から、氷見市内で生まれたお子様へ、地元の木で、地元の木工作家がつくった木のおもちゃをプレゼントしていますが、この贈呈を本施設で行い、一緒にご来場いただいたパパ、ママにお子様のお名前を刻印してもらうといったセレモニーを行うことを検討します。

- 木育を通した交流、小さな仕事づくり
  誕生祝い品となる木のおもちゃの仕上げや、検品といった仕事を、本施設でお子様を遊ばせながら、ママ達がおしゃべりしながら作業する、あるいは福祉施設との協同で行うことにより、木の良さを伝える木育と、小さな仕事づくりを生むような場を目指します。

2．着地型観光の推進拠点

氷見の自然を活かした体験プログラムが頻繁に行われる場となることで、「訪れるたびに、新たな出会い、体験と発見がある」場を目指します。また、将来的には周辺のキャンプ場や民宿等と連携した宿泊型体験プログラム、グリーンツーリズムを行うことで、氷見市の着地型観光を推進する場となり、氷見の自然への入口となることを目指します。

【具体的な取組みイメージ】

- 自然観察ツアー
  海浜植物園の前には、富山県内で数少ない自然海岸が広がります。周辺の松林、雑木林も含め、植物や昆虫、小動物について、専門員のガイドとともに散策し、木のおもちゃを入口に、実際に生きている身のまわりの自然を体感していただくことができます。

- 木工体験プログラム、入学祝学習机プロジェクト
  木工経験豊富なスタッフと一緒に、糸のこ等の道具を使った木工体験を行います。また、本施設を拠点に市内の保育所で出張木育プログラムを提供したり、木育に取り組む保育所等に工具の貸出を行う仕組みを作ることを目指す他、小学校の入学祝い品として氷見産材を使った学習机を、新入生と一緒に作って贈呈するといった事業を検討します。

３．林業分野における地域商社機能

この木育拠点では、氷見産材による木工製品の商品開発、及び消費者への直接販売を行うことにより、市内の林業・木材加工業の活性化に貢献することを目指します。氷見産材で作られた内装木質化空間、木工製品は、それ自体がショールームの役割も持ち、内装木質化空間は移動・組立式で自由なレイアウト変更が可能な商品とすることで、将来的には、氷見市版木育キャラバンとして、屋外展開や出張 PR することを目指します。

【具体的な取組みイメージ】

- 商品開発体制の確立
  既に試行実験を始めているように、林業・木材加工業界だけでなく、教育、福祉関係者、市内企業、市民団体など、業種の垣根を越えたネットワークをつくることで、氷見産材を使った商品開発を進めます。また、引き続き富山大学芸術文化学部との連携を進める他、近隣市町村との広域連携についても検討します。

- 販売体制の確立
  都市部の民間企業から、経営やマーケティングに通じたマネージャーを招聘します。マネージャーを中心とした推進組織が、金融機関等とも連携しながら、都市部や海外への販路拡大を目指します。

なお、本ビジョンの方向性について、平成 30 年 10 月 5 日（金）から 8 日（月）にかけて行われた「木育キャラバン in 氷見」において来場者アンケートを行ったところ、以下のようなご意見を頂くことができました。

子ども達に体験の機会を

- 子ども達に色々な体験をさせたいと思っているので興味深いです。
- 子どもがいろんな体験ができるコーナーやイベントがあると良いと思う。木に触れられるのは気持ち良いし、本物の木のおもちゃはなかなか高くて買えないので。
- 子どもの体験・体感できるイベントがいいと思う。
- 木の温もりを子どもに全身で感じてほしいので、とても良い取り組みだと思います。
- 子どもが楽しめて、大人が集まる施設であれば良いと思う。
- 素敵だと思います。特に子育て世代として（1）はとても有難いです。(2) も宿泊型体験だと利用しやすく良いと感じました。(1) は市外からでも利用しやすいと嬉しいです。

大人の木育・多世代交流

- 「大人のための木育」の言葉が魅力的です。木を身近に感じられ、木に親しめる場所になるよう期待しています。
- 自然の物で遊べるのはとても良いと思います。子どもも大人も楽しめる多世代交流の場が素敵だなと思いました。
- 学童保育等の福祉的な役割とも協働出来たら素敵かと。
- 小さい頃から木に触れ合うこと、大人も年齢に関係なく木のある生活をすすめているところが良いと思います。
- お年寄りから子どもまで楽しめると思う。
- 交流の場ができるのはとても嬉しいです。また木製玩具はなかなか買えないので、その玩具で思いきり遊べる場所があるのは嬉しいです。自然の中での体験からは様々なことが学べ、とても良いと思います。

木のおもちゃを通して感じる

- 肌触りが良く、温もりのある木のおもちゃに触れ合う機会ができ、とてもいいと思います。
- 安心感がある。
- 大型の木製玩具で遊べる所がない。お年寄りが集まる場所はあるが、子ども達が集う場所はあまりないと思う。子ども中心にすれば自然に大人も集まる

と思う。

- 日頃あまり触れることのない木や木の匂いを感じられるのは良いと思う。
- 木のおもちゃは子供にとってもいいし、長く遊べていいので子ども達のために是非つくってほしい。
- 木のおもちゃが常時置いてあるのは嬉しいです。
- 最近は木材で遊べる場所がないので非常に良いと思う。
- 素敵だと思います。木のおもちゃの空間が常設されていたらもっと遊びに来たいなと思います。
- 良いビジョンだと思います。竹馬、竹トンボのコーナーがあれば…

ものづくり体験

- 子どもと一緒に木工してみたいです。（簡単なイスや棚）
- 常に木のおもちゃがあると思うと、また子ども達を遊ばせに来たいなと思うので良いと思う。製作体験などできると楽しいと思う。

自然体験

- とても良い企画だと思います。氷見市外の者でも利用できると嬉しいです。
- 木のアスレチックと海を活かした場所。
- 自然に触れるチャンスが少ないので、触れる事ができる事が多ければ嬉しい。
- 自然の中でコテージのような形で宿泊できる施設があるといいです。木と木の間にハンモックを掛けたりしてのんびりしたいです。
- （2）が良いと思う。
- 自然に触れる機会も減っているので、いつでも木に関わることができるのは良いと思います。
- （2）について市外からの方向けももちろんですが、市内の子や、大人も参加できる体験プログラムがたくさんあればいいと思います。市内の方向けであれば日帰り、半日、数時間など所要時間にも種類が多ければ良いと思います。
- 自然に触れる機会を増やすのはとてもいいことだと思います。
- どのテーマも重要だと思います。しかし未来に繋がり、責任を持って最後までやりとげられるものを少数選び取った方がよいかと。個人的には自然につながる教育をと思います。

氷見の木を活かす

- 氷見産のおもちゃに触れ合える場所があるのはいいと思う。
- 氷見産材で子どもからお年寄りまで、様々な世代が交流できる事は良いこと

だと思いました。

- 地域の林業を後世に残すためにも、良い取り組みだと思います。
- 木がどうやって様々な製品になるのか、どんな人達がどのような仕事をしているか、木の運搬も含め教える。
- 物づくりの過程など、身近なものが木材から出来上がるところが分るとより親しみが湧くと思います。
- 自然を感じることができ、木のありがたさを感じることができて、良いと思います。
- 多方面から木に触れる取り組みがあることは、いい事だと思う。

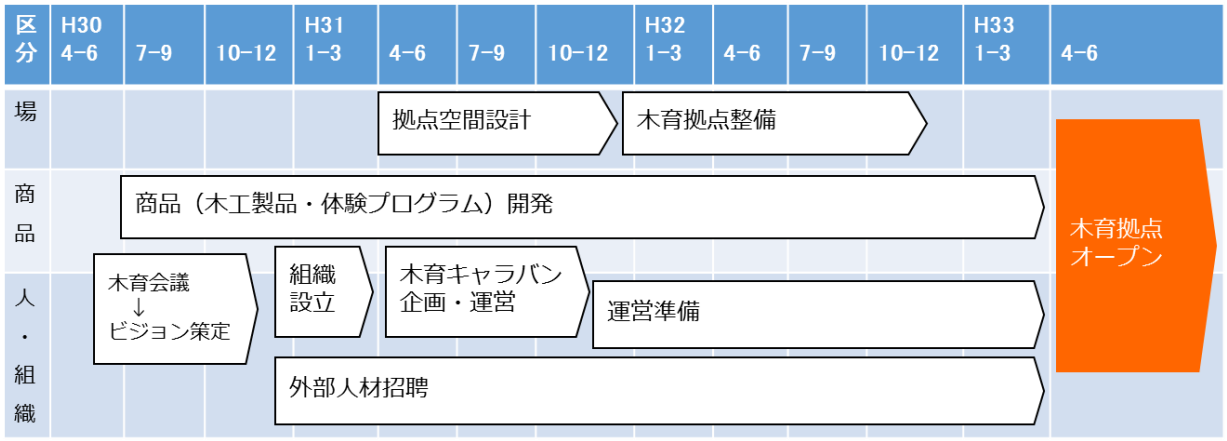
木育ビジョン

- 色々な年齢を対象として木の持つ温もり、健康づくりに役立つビジョンを検討していって「氷見市の強み」として考えていってください。
- 植物園と木育のつながりが一見分らないのでもっと説明がほしい。「木育」という言葉に込めた意味をもっと具体的に分りやすくした方が良い。
- 木育ビジョンをもっと多くの人に知ってもらい広まれば良いなと思います。

今回頂いたご意見は、今後具体的な木育拠点整備を検討していく上での参考とさせていただきます。また、今後、この氷見市木育ビジョンについて、市内外の各種団体のご協力を頂きながら、子どもから大人まで、より多くの方々へとお伝えしていくと共に、単なるビジョンにとどまることなく、実践してまいります。これからも氷見市の木育の取組みに、ご支援、ご協力をいただきますことを、お願いいたします。

6. 今後の予定

今回、氷見市木育ビジョンが定められましたが、今後は平成 33 年 4 月の木育拠点オープンを目指し、以下の取り組みを行ってまいります。



平成 30 年度は、木育ビジョンの策定と並行して、商品開発の試行実験を行います。これは、氷見産木材の商品開発を地域内で継続して行える体制を構築することにより、氷見市における林業、木材加工業の振興を図ることを目的としたもので、ひみ里山杉活用協議会を中心に、富山大学の芸術文化学部等と連携した子ども向け家具製品などの開発を目指します。

また、平成 31 年 1 月からは、木育推進組織の中心となる外部人材を、今後設立を目指す木育の拠点場所である海浜植物園の園長として招聘します。これにより、平成 30 年度内に木育推進組織を設立することを目指します。

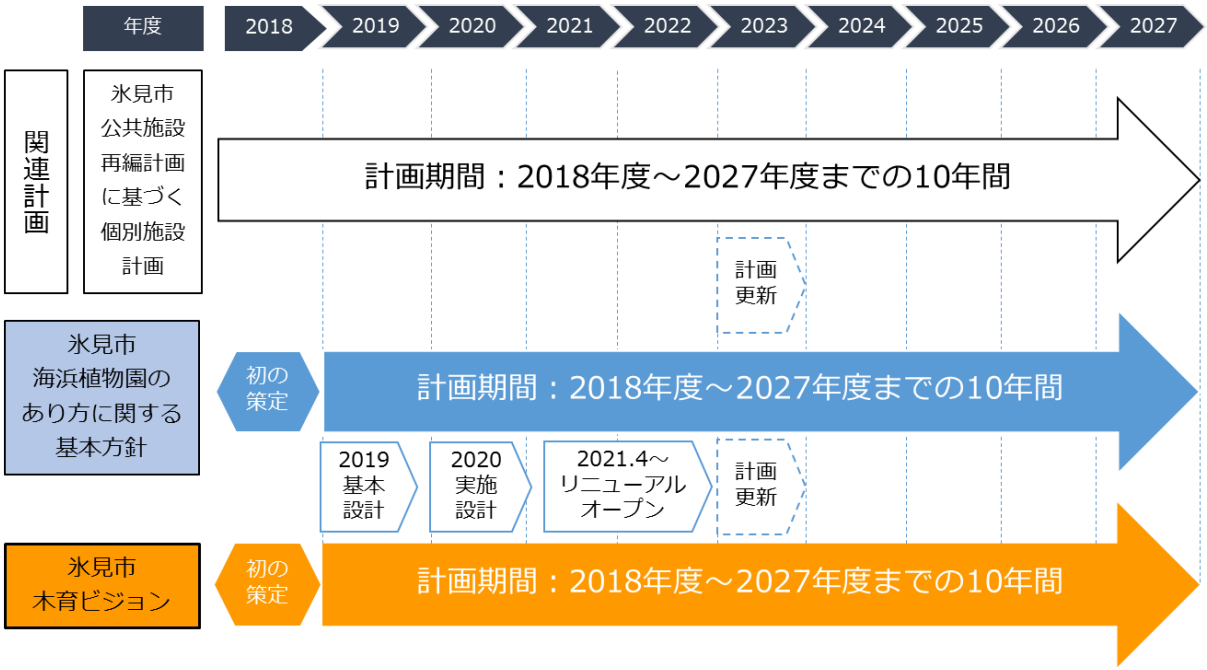
平成 31 年度は、内装木質化製品の商品開発に取り組む予定で、平成 32 年度の木育拠点整備に向けた動きを加速させます。また、平成 32 年 10 月には、木育推進組織が中心となって木育キャラバンを運営し、木製玩具を集めた場の運営と、野外では自然体験プログラムを提供することで、次年度以降に向けた試行実験を行います。

そして平成 32 年度には木育拠点整備を行い、平成 33 年 4 月以降、本施設を拠点に、木育の継続した効果波及に向けて取組み、氷見市の地方創生を目指してまいります。

7. ビジョンの位置づけ、計画期間

木育の拠点場所である氷見市海浜植物園については、「氷見市公共施設再編計画」において示された「維持・長寿命化対象施設」という方向性を踏まえつつ、「個別施設計画」に重なるものとして、平成 30 年度に「氷見市海浜植物園のあり方に関する基本方針」が策定されます。

本基本方針の計画期間と合わせるため、2018 年度（平成 30 年度）から 2027 年度までの 10 年間とし、進捗状況のフォローアップ結果等を踏まえ、5 年後に計画更新を行うものとします。



8. 資料編

(1) 氷見市木育ビジョン策定の経緯

第1回 木育実務者 会議	日時：平成30年4月6日（金）14:00～16:00 場所：氷見市海浜植物園2階エレベーターホール 内容：・今後の木育の動きについて
4月度 ひみ里山杉活用 協議会会議	日時：平成30年4月9日（月）18:30～20:00 場所：岸田木材（株）2階 内容：・今後の木育の動きについて
第2回 木育実務者 会議	日時：平成30年4月18日（水）14:00～16:00 場所：氷見市海浜植物園2階エレベーターホール 内容：・目指す姿について ・商品開発に向けて
5月度 ひみ里山杉活用 協議会会議	日時：平成30年5月14日（月）18:00～20:00 場所：岸田木材（株）2階 内容：・今後の協議会の動きについて
6月度 ひみ里山杉活用 協議会会議	日時：平成30年6月11日（月）19:00～21:00 場所：岸田木材（株）2階 内容：・商品開発に向けて
第3回 木育実務者 会議	日時：平成30年7月3日（火）18:30～19:30 場所：氷見市海浜植物園2階エレベーターホール 内容：・組織体制について
第1回 木育会議	日時：平成30年7月10日（火）13:00～15:00 場所：氷見市海浜植物園2階ワークショップ 内容：・氷見市木育ビジョンの策定に向けて
木育キャラバン in氷見	日時：平成30年10月5日（金）～8日（月） 場所：氷見市海浜植物園 内容：・ひみの木しごと人の集い （市内林業・木材加工業者へのヒアリングなど） ・来場者アンケート （氷見市木育ビジョン策定、商品開発に向けて）
第2回 木育会議	日時：平成30年10月30日（火）15:00～17:00 場所：氷見市海浜植物園2階ワークショップ 内容：・氷見市木育ビジョンの策定 ・今後に向けて

(2) 氷見市木育会議実施要綱

氷見市木育会議実施要綱

（目的）

第１条　この要綱は、氷見市が今後目指すべき木育の姿について協議を行い、氷見市木育ビジョンを策定するため、氷見市木育会議（以下「会議」という。）を実施し、その組織及び運営について必要な事項を定めるものとする。

（所掌事務）

第２条　会議は氷見市が今後目指すべき木育の姿について必要な事項の検討を行い、氷見市木育ビジョンを策定する。

（組織）

第３条　会議は、次に掲げる者９名以内により構成される。

(1)　関係諸団体の役職員

(2)　学識経験を有するもの

(3)　関係行政機関の職員

(4)　前３号に掲げる者のほか、市長が必要と認める者

（座長等）

第４条　会議には座長及び副座長各１名を置き、出席者の互選によって定める。

２　座長は、会務を総理し、会議を代表する。

３　副座長は、座長を補佐し、座長に事故があるときは、その職務を代理する。

（会議）

第５条　会議は、座長がその議長となる。

２　会議は、出席者の過半数をもって成立する。

３　会議の議事は、出席者の過半数で決し、可否同数のときは、座長の決するところによる。

（庶務）

第６条　会議の庶務は、建設部花みどり推進室において処理する。

（細則）

第７条　この要綱に定めるもののほか、会議の運営に関し必要な事項は、座長が会議に諮って定める。

付則

この要綱は、平成３０年６月８日から施行する。

(3) 氷見市木育会議メンバー一覧

１．メンバー一覧

No	所属	役職	氏名
1	氷見市	市長	林　正之
2	氷見市保育士会	会長	瀬戸　弥布子
3	富山県西部森林組合　氷見支所	支所長	種部　修史
4	ひみ里山杉活用協議会	会長	丸谷　芳正
5	ＩＫＡＲＩ木工舎	代表	渡邉　伊規子
6	ＮＰＯ法人ひみ森の番屋	事務局長	佐藤　文敬
7	ＮＰＯ法人芸術と遊び創造協会	理事長	多田　千尋
8	富山大学芸術文化学部	講師	内藤　裕孝
9	氷見伏木信用金庫	理事長	藤井　隆

その他、希望する木育インストラクター（保育士、お母さん方等）がオブザーバーとして参加

２．事務局一覧

No	所属	役職	氏名
1	建設部	部長	大野　一也
2	建設部　花みどり推進室	室長	鈴木　瑞麿
3	建設部　花みどり推進室	主査	古谷　忠久
4	建設部　花みどり推進室	主任	伊東　翼
5	建設部　花みどり推進室	主事	山田　綾乃